－所蔵作品紹介－

因藤　壽　INDŌ Hisashi

作品78・3・9・A

さくひん78・3・9・A

作品データはこちら

因藤の仕事は1956年以来一貫してモノクロームだが、マティエール（表面の質感）にはいくつかの変化がある。粗っぽく線条痕が刻まれたもの、きめ細かなもの、そしてここにあげた作品のように平滑だが線や手形の凹凸があるものなどである。この凹凸はパネルにベース剤を盛り、形を作ってから上にキャンバスをかぶせ、そこに絵具を塗っては研磨する作業を何度も繰り返して生み出される。一見黒だが、実は紫色の絵具が用いられており、上記の作業によって黒に見える色へと変化させられているのである。

しかしマティエール作りそれ自体は目的ではなく、「材料に対する行為の過程の痕跡として、結果的に物質化したもの」*1と作者はいう。大事なのは「行為」であり、行為を通して「人間の生とか存在とかの根源にあるもの」*2を探るのが、因藤のテーマなのである。モノクロームを選ぶ大きな理由のひとつも、絵の内容を行為の担う意味へと集中させていくのに最も適しているからだ。

こうした生の根源への志向が生まれた背景として、作者はふたつの実体験をあげている。ひとつは、先の大戦で軍務につき死を覚悟したにもかかわらず、生き残ったこと。それが「生き得たというより、生かされたという意識」*3 を呼び起こし、自らを生かしめたものを探らずにはいられなくなったという。もうひとつは超短波の研究中、人間の五感では直接とらえられなくても確かに何かが存在する「場」があるのを知ったことである。

行為としての、あるいは場としての絵画という因藤の認識は、前後美術の流れのなかでとらえてみればアンフォルメルや抽象表現主義が開いた絵画観と通じ合う。だがこの両者が、例えて言えば爆破と解体という手段で造形主義を破産させたとするならば、因藤の画面は逆に強烈な凝集力で造形主義とは別の地点に立った。その凝集力こそが、因藤の仕事を宗教や哲学の誠実な部分に代表される営み、つまり存在の核心を謙虚さと感動を失わず探求する営みの系譜に連ねることを可能にしたのである。

*引用は１因藤壽「材料に対する行為の痕跡」（『美術手帖』193号、1961年９月）、２因藤壽＋加藤郁乎・対談「因藤壽と語る－「原絵画」を求めて」（『みづゑ』876号、1978年３月）、３因藤壽「私の制作に於ける下層上層の関係」（『アクリラート』21号、1993年６月）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より